

# KOREMITE

考古学

歴史学

民俗学

展示

— 東北学院大学博物館 収蔵資料図録 — **VOL.1**

松  
河



平安時代の  
イケメン!?



仙台藩の「美」

モチーフは  
伊達家の家紋?



「伊達騒動」の  
全貌が明らかに!



■基本情報 ■時期：平安時代前期 ■出土遺跡：宮城県多賀城市市川橋遺跡

■寸法：高さ16.2cm 口径15.5cm 胴経15.1cm 底経7.0cm



## 四つの顔に描かれた、古代陸奥国の「祈り」

### 墨書人面土器とは

墨書人面土器とは、土器の外面に人の顔が描かれた土器で二～四面描かれるものが多く、器形は主に壺・甕である。平城京・長岡京・平安京といった古代の宮都から多く出土し、地方からは国府や郡家のような官衙関連遺跡から多く発掘される。出土遺構は、溝や河床といった「流れ」に関する場所がほとんどで、古代の人々が穢（けがれ）などを祓う目的で流したものと考えられている。

### 本資料について

当博物館のシンボル展示である墨書人面土器は、深鉢型の土器で、外面に1.0cm～1.5cmの段が附せられている点から、ろくろ成形の土器であることが分かる。土器の年代は、形式から考えて平安時代前期のものと推定されている。人面は四面描かれており、眉・目・鼻・口・鼻ひげ・あごひげ・耳が端正に表現されている。

昭和34年(1959)～昭和37年(1962)に行われた砂押川河川改修工事の際に、多量の遺物と伴に出土し、出土層は現在の市川橋付近の水田面下3～4mの黒色土層と考えられている。発掘後、東北学院大学工学部に保管展示され、その後文学部史

学科加藤孝助教授(当時)が研究資料として土樋キャンパスに持ち帰るが、定年退職時に多賀城市埋蔵文化財調査センターに寄託された。平成21年(2009)4月に東北学院大学博物館設立に伴い当館の展示資料となり、現在に至る。

### 墨書人面土器が出土した市川橋遺跡

出土地である市川橋遺跡<sup>\*1</sup>は、多賀城跡の南面に広がる遺跡である。多賀城<sup>\*2</sup>には陸奥国府と鎮守府(のちに胆沢城に移転)が置かれ、律令国家による東北支配の拠点であった。城内では日常政務の他に、政庁において元日朝賀や蝦夷(えみし)の朝貢儀礼等が行われた。

一方、城外においては市川橋遺跡をはじめ、河川跡から奈良～平安時代の遺物として墨書人面土器の他に斎串(いぐし)や人形(ひとがた)など祭祀に関わる遺物が数多く出土している。おそらく、市川橋遺跡周辺の河川において、多賀城の役人あるいは城下に住む人々が水辺の祭祀を行い、その際に本資料が使用されたと考えられる。

学芸研究員 熊谷 明希

用語解説 詳しくはP26へ

\*1 市川橋遺跡

\*2 多賀城

### 学芸研究員の



学芸研究員  
熊谷 明希

墨書人面土器の用途については、古代における「贖物(あがもの)」との関連性が指摘されています。贖物とは、人々が罪や穢を祓い清めるため、その代償として差し出す物品のことです。平安時代の儀式書に、大祓(おおはらえ)という儀式の際に用いられる「御贖物」の一つとして、「埴(つぼ)」が記されています。これによると、天皇が「埴」に息を吹きこみ、他の御贖物と一緒に河に流す規定でした。本資料も、おそらく穢などを祓い清める目的で河川に流されたものと考えられます。

この資料のココがすごい!!

河川跡から出土したのにも関わらず、保存状態がすごく良い!

お気に入りポイント

なんととっても端正に描かれた顔! まさに墨書“イケメン”土器?!

■年代：慶長13年(1608) ■採収地：岩手県一関市大乘寺

■材質：木・布 ■寸法：(左)縦32cm 横13cm (右)縦26cm 横13cm



この資料のココがすごい!!

慶長十三年の紀年銘が入ったとても古いおしらさま。現在に至るまでどのように祀られてきたのだろうか?

お気に入りポイント

家に祀られるだけではなく、巫女の重要な祭具だった!

## 学芸研究員の



学芸研究員  
遠藤 健悟

柳田國男の「遠野物語」にも取り上げられたおしらさま。家の神として知られていますが、巫女の祭具としても重要なものでした。巫女が、おしらさまを振りながらその由来を説く姿は人形劇のようにも見えます。まだまだ謎が多いおしらさま、その役割とは一体なんだったのか?



## 巫女の必需品?

## 多様な信仰を集めるおしらさま

### おしらさまをめぐる多様な信仰

青森・岩手県を中心として、東北地方に広く分布するおしらさまは、家の神、蚕の神、農業の神、馬の神として信仰されてきた。おしらさまは、頭部が男女の人頭か、馬頭と姫頭の一对の木偶で、木製が一般的であるが、宮城県や山形県には竹製のものもある。ふつうは家の神として神棚に保管され、毎年祭日には女性のみが参加し、おしらさまを取り出して飾り、衣を一枚重ね足して祭礼を行う「おしらさま遊ばせ」をするものが多い。

一方、当館が収蔵するおしらさまは、それらとは少し性格が違うもので、民間宗教者でオガミサマと呼ばれる巫女が祭具として携帯したものとされている。オガミサマが祭具として用いる場合、おしらさまを両手に持ち、上下左右に振って、託宣の儀礼を行った。この際説かれるおしら祭文は、おしらさまの由来を説く物語である。この物語の多くは馬娘婚姻譚で、この由来と木偶が結びつくことで、家の神という性格に加え、蚕の神や馬の神として信仰されるようになった。

### 大乘寺伝来の「おしらさま」

本資料は、岩手県一関市川崎町薄衣の大乘寺に保管されていた二体一对のおしら

さまで、慶長11年(1606)の紀年銘の入った大変古いものである。大乘寺は、宮城県北部から岩手県南部で活動するオガミサマの宗教的な中心地であり、後継者がいないとおしらさまを大乘寺に納めるといった場合が多かった。そのため、大乘寺にはオシラ堂が設置され、毎年10月16日にはオコモロガエと称して、オガミサマが集まり新しい赤い衣を着せる行事が行なわれている。大乘寺には多数のおしらさまが集まり、現在では約200体が納められている。これらのおしらさまは、いずれも家の神としての性格とは異なり、貴重な資料群として岩手県の有形民俗文化財に指定されている(当館資料は指定外)。また、紀年銘が入っているおしらさまは必ずしも多くはない。このような紀年銘を入れる経緯は、おしらさまの祀られかたの変遷が関わるものと考えられるが、それを明らかにする資料は少ない。本資料を含め、おしらさまについてさらなる調査・研究が期待される。

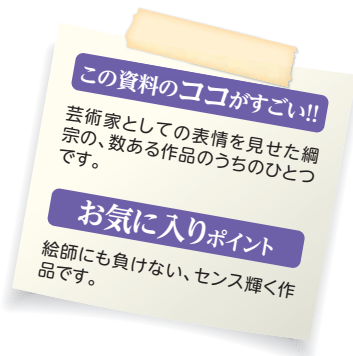
学芸研究員 遠藤 健悟  
実習生 藤田麻里子

用語解説 詳しくはP26へ

\*1 おしら祭文

基本情報 ■作者：伊達綱宗 ■年代：寛永17年(1640)～正徳元年(1711)

■寸法：縦87cm 横30.9cm (本紙部分)



### 学芸研究員の

伊達騒動により、あまり良くないイメージがついてしまった綱宗ですが、芸術に関して秀でた才能を発揮しました。

学芸研究員  
砂金 春奈



## 家紋に由来する縁起の良い絵

### 芸術の才能に恵まれた藩主

本資料は、伊達綱宗の誕生寛永17年(1640)～死没正徳元年(1711)までに描かれた作品である。

21歳の若さで隠居を強いられた綱宗は72歳で没するまでの50年間で品川の大井屋敷で過ごす間、様々な芸術に傾倒していき、特に絵については専門絵師にも引けを取らないとの評価を得る出来になっており、現在では仙台市博物館に所蔵されている「絹本著色霊昭女(けんぼんちゃくしよくれいしょうじょ)・牡丹(ぼたん)・芙蓉図(ふようず)」や「花鳥図屏風」が著名な作品として挙げられる。

本書画に描かれているのは竹と雀だが伊達家の家紋の一つ「竹に雀」\*1があることから、おそらく家紋をモチーフに描いたのではないかと推察できる。

### 綱宗の生涯

綱宗は幼名を巳之助と言ひ、仙台藩2代藩主伊達忠宗の6男として誕生した。忠宗の側室の貝姫が母親であったが、貝姫は寛永19年(1642)に病没し、その後正室である振姫の養子に迎えられる。

正保2年(1645)に振姫の息子である光宗が19歳で急逝すると、忠宗は7歳の巳之

助を自身の後継者として将軍に披露し認知を得た。

承応3年(1654)巳之助は15歳の時に元服し、将軍徳川家綱から一字を拝領し綱宗と名乗り、従四位下侍従兼美作守に任ぜられた。仙台藩での嗣子の元服は江戸城の将軍の御前で行い、その場で一字拝領、任官が慣例であったのに対し、元服の儀式を江戸下屋敷で行い、後に登城して将軍に御目見得の上、一字拝領とした綱宗は異例であった。万治元年(1658)7月に忠宗が没すると、訃報を受けた幕府は2か月後の9月に綱宗による家督相続を許可し、ここに仙台藩3代藩主綱宗が誕生する事となる。

万治3年(1660)幕府による家督相続の許可を受けた僅か2年後に綱宗は幕府から逼塞(ひっそく。江戸時代、武士に加えた刑罰の一つ。門を閉じて白昼の出入りを禁じた。)を命じられる。伊達家の正史である『治家記録』には「故あり逼塞」としか記されていないが、江戸幕府の正史である『徳川実紀』には逼塞の理由として酒と女に溺れ、家臣の忠告にも耳を傾けなかったためだとしている。

学芸研究員 砂金 春奈  
実習生 五十嵐 駿

用語解説 詳しくはP26へ

\*1 竹に雀

基本情報 ■発給者：伊達綱村 ■年代：天和3年(1683) ■寸法：縦48.0cm 横35.0cm



## 仙台藩4代藩主 伊達綱村が 家臣石井甚右衛門に宛てた知行宛行状

### 伊達綱村領知朱印状とは

この資料は仙台藩4代目藩主である**伊達綱村**<sup>\*1</sup>が石井甚右衛門に宛てた朱印状である。

本文には「桃生郡中津山村之内五貫九百三拾九文目録在別紙全可領知者也仍件如」とあり、石井甚右衛門へ中津山村の一部を領知とする内容が書かれている。

また、**知行宛行状**<sup>\*2</sup>の他に奉行数名の名前と印・花押のはいった知行目録も送られており、これら2つが自身の身分・家格、領地を保証するものとして大事に保管されていた。

こうしたことから多くの場合、この2つがセットで見つかることがほとんどである。

### 朱印状の歴史

朱印を押した武家文書である朱印状の初見は『永正9年(1512)3月24日今川氏親棟別役免除朱印状』で、それまで使用されていた花押に代わって使用された。

今川家について、後北条氏・武田・長尾・上杉・里見・伊達の諸氏、それに織田信長・豊臣秀吉・徳川家康へと急速に普及したことから東国が先駆地であると考えられている。中でも織田信長の使用した「天下布武」は有名である。

江戸時代になると將軍家や諸大名が知行充行や知行安堵をする場合や、社寺への土地寄進をする際に使用された。

### 綱村時代の仙台藩

本資料が作成された天和3年(1683)頃は伊達綱村が藩主として仙台藩における各役職の勤務体制の整備や改編を行っていた時期である。

その特徴としては政宗・忠宗時代に中心となっていた一家・一族層に代わり、4代藩主の綱村と5代藩主の吉村によって中級家臣から登用された人びとが藩政の運営にあたっていることがあげられる。

つまり、綱村によって制度の改廃・新設、人材登用や儒学および仏教への傾斜にみられる極端な政治が行われた。

学芸研究員 佐藤 由浩  
実習生 山口 翔也

### 学芸研究員の



学芸研究員  
佐藤 由浩

歴代藩主が家臣に宛てて出した領知を保証する証明書です。当時の家臣は火事などの災害時には真っ先に持ち出して逃げたと言われるほど大事な物でした。

### この資料のココがすごい!!

印は藩主によって全て違います。ぜひ見比べてみてください。

### お気に入りポイント

使用されている紙は丈夫で、どれだけ重要な書類だったのかを物語っています。

用語解説 詳しくはP26へ

\*1 伊達綱村  
\*2 知行宛行状

基本情報 ■作者：林子平(1738~93) ■年代：寛政3年(1791)

■寸法：縦24cm 横16cm 厚さ1.2cm



## 日本の海防のもつ問題点を指摘した書物・海国兵談

### 著者・林子平について

林子平は、江戸時代の経世家で、父は学問に精通した幕臣岡村良道であったが、罪を得て除籍されたため伯父の林従吾に育てられた。姉が6代藩主伊達宗村の側室になった関係で、兄が仙台藩士に召し抱えられ、仙台に移住した。

### 海国兵談とは

林子平の代表的な著書で天明6年(1786)に脱稿し、寛政3年(1791)に刊行された。

作者の林は長崎の<sup>\*1</sup>洋学者を通じて海外事情の研究を行い、日本が四方を海で囲まれた「海国」であることに注目し、本書では海辺の守りについて著している。

その中で、ロシアの南下政策に注意をうながし、外国に対するための軍備を早く整えることを主張して、海上での戦いや大砲による戦いの重要性を説いている。特に、海国の防備策として水戦に注目し、洋式軍艦の建造、海軍の振興、大砲の沿岸装備などを説き、江戸湾防備の必要性を強調した。

また、政治の中枢である江戸が海上を経由して直接攻撃を受ける可能性を指摘し、江戸湾の入り口に信頼のおける有力諸侯

を配置すべきであると論じている。この江戸湾防備の緊急性を説いたのは林が最初であり、対外問題の切迫をいち早くおおよけにした。

### 版木の没収と再刻

海国兵談は、当初1000部を目標に出版をはじめたが、自家蔵板であり巻数が多いことから、資金不足となった。そのため、寛政3年(1791)、わずかに38部を刊行したところで、出版取締令に違反するとして幕府に召喚され、翌年に版木が没収された。この時林は自写による副本を秘かに所持していたため、後世に伝わることとなった。

以後、19世紀には実際に江戸湾の海防強化政策が幕府によって採用されるなど、幕末海防論の起点となった。林の海防論に現われた強い対外的危機感、富国強兵論などは近代日本に強い影響を与えた。

学芸研究員 森 千可子  
実習生 曾我部絵梨

用語解説 詳しくはP26へ

\*1 洋学

### この資料のココがすごい!!

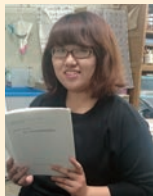
林子平は、江戸湾に異国船が侵入する可能性があることを指摘し、江戸湾の防備が急務であると主張しています。江戸湾防備は、のちに、差し迫った問題となりますが、これを予見したのは、この本が最初です。

### お気に入りポイント

海国兵談は、一旦は出版停止になったものの、後の時代に海防論の起点となりました。そして、近代日本にまで強い影響を与えたことがお気に入りです!

### 学芸研究員の目

この書物は、林子平が、当時のロシアの千島、北海道への南進に危機感を抱き、警告するために書かれたものです。荻生徂徠の兵書『録(けんろく)』の影響もあり、第14~16巻では武士土着論・富国策にも触れていますが、全般として国内戦の勝利よりも、対外戦の備えを論じました。



学芸研究員  
森 千可子

基本情報 ■作者：燕石斎薄墨(?~1834) ■年代：文政8年(1825)

■寸法：縦17.1cm 横12.1cm



塩竈神社参詣の旅を綴る  
子ども向けの教科書

往来物とは?

『塩竈詣』は往来物<sup>\*1</sup>に分類される冊子である。現在でいえば、往来物は小学校の教科書であり、平安末期から明治初期まで使用された。往来とは書簡往来の意である。往来物の初期段階では、実際に使用された手紙を用いていたが、時代が下るにつれて語彙や慣用句を連ねただけのものが多くなり、江戸時代には寺子屋の教科書として用いられた。往来物の種類について、平安後期には現存最古の往来物で故事成語を多く用いた『明衡往来(めいごうおうらい)』など七種、中世には武士の交際・教養、日常生活に及ぶ基礎知識や用語を盛り込んだ『庭訓往来(ていきんおうらい)』など数十種、近世には数千種にのぼった。

編者は中世以前が貴族・僧、近世は文人・手習い師匠が多く、時代によって往来物の種類や編者の性格も異なっている。江戸時代において、往来物が数千種にのぼったことから、どの往来物を選んだらいいのか、悩んだ人がいたのかもしれない。

塩竈詣には地名や難しい文字には読み仮名がふつてある点から、子どもたち向けに読みの練習に使われていたと考えられる。往来物は明治初期以前の子どもの教育に影響を与えて大きな役割を果たし、重要な資料として高く評価されている。

作者の燕石斎薄墨燕(えんせきさいうすずみ)は水戸出身であったが、仙台に移り、『塩竈詣』だけでなく、『奥道中往来』、『平泉詣』などの数多くの著作を発表し、内容

がわかりやすいという民衆からの評判があった。

塩竈までの旅と足跡

『塩竈詣』には塩竈神社<sup>\*2</sup>へ参詣しようと旅立つ場面があり、旅立ちの雰囲気を出すため、川下りの挿絵や『伊勢物語』で在原業平が都から旅立つときに読んだ和歌が引用されている。

本文中には塩竈神社に至る道の途中で通過したとみられる、歌名所の「宮城野」や「木の下」といった現代にも残る地名、「壺石」や「沖の石」など多賀城の名勝地が登場する。古代、奥州みちのくは、歌枕を数多く抱える地として憧憬の対象となっており、都の公家や歌人たちの間で、教養として伝承されていった。江戸時代、俳人・画家・儒者などの文人が、松島や塩竈を一見するために来遊した。彼らは、古代以来和歌に詠みこまれた風景を実際に確かめ、奥州を旅した西行のような漂泊の歌人たちの人生を追体験するために塩竈神社などを巡見した。塩竈詣は子ども向けの教科書であるが、奥州に思いをはせて塩竈神社を参詣した人々の旅を凝縮し、彼らの歩んだ道り、その足跡を伝えてくれる。

学芸研究員 安保 智  
実習生 木村 智

用語解説 詳しくはP26へ

\*1 往来物  
\*2 塩竈神社

この資料のココがすごい!!

目的地である塩竈神社までの旅が綴られ、旅をした人の動きがわかります!

お気に入りポイント

挿絵があり、子どもたちも挿絵を見てイメージを広げたのでしょ!

学芸研究員の目

往来物は子どもたちのための教科書であり、子どもの教育に不可欠でした。その内容は分かりやすいものが多く、往来物を著作した人物の工夫と努力がうかがえます。



学芸研究員 安保 智

基本情報 ■作者：舟津求馬(生没年不詳) ■年代：天保3年(1832)

■寸法：縦23cm 横17cm 厚さ0.5cm



## 仙台藩に起こった悲劇を記す

### 今なお語り継がれる事件

本資料は享保3年(1832)に舟津求馬によって写されたもので、表紙表題は「仙台萩」とされている。本資料は写本で、6冊1組で構成されている。1巻目には、「奥州仙台萩(壹)」から「奥州仙台萩(拾壹)」までの目録が書かれている。このことからおそらく原本は11冊あったのではないかと考えられる。

「奥州仙台萩」は全巻にわたり、仙台藩3代藩主伊達綱宗\*1の時代に起きた御家騒動、いわゆる伊達騒動について書かれている。例えば「奥州仙台萩(壹)」には、一般的に伊達騒動と呼ばれている寛文事件の主要人物である伊達宗勝、刃傷事件を起こした原田甲斐の名が記載されているのを見ることが出来る。

伊達騒動について書かれたものは、他にも仙台藩の「治家記録」、「伊達秘録」や「伊達実録」など多岐にわたる。

### 伊達騒動とは

江戸時代前期に起こった仙台藩の御家騒動である。寛文事件とも呼ばれている。万治3年(1660)伊達綱宗は不行跡により幕府から隠居を命じられ、綱宗の実子で、まだ2歳だった亀千代(後の綱村)が家督相

統することになった。その際、伊達兵部少輔宗勝(綱宗の叔父)と田村右京宗良(綱宗の庶兄)が62万石のうちからそれぞれ3万石を与えられて後見となった。

寛文6年(1666)に奉行として残ったのは柴田外記朝意原田甲斐宗輔(しばたげきとももとはらだかいむねすけ)、古内志摩義如(ふるうちしまよしゆき)であり、甲斐が特に重用された。寛文11年(1671)までに兵部らによって処罪された人数は120人、うち斬罪、切腹は17人を数えた。

他方で、伊達安芸宗重は伊達式部宗倫と寛文5年(1665)以来領地の境界紛争を重ね、寛文10年(1670)式部の死後裁定の不正を兵部らに訴え、さらに幕府に対し兵部、甲斐らの非違を訴えた結果、幕府の審理は寛文11年(1671)2月に開始された。

伊達安芸、柴田外記、原田甲斐、古内志摩が大老酒井忠清の邸に召喚されたが、審問の終わったところ、甲斐は突然安芸に斬りつけて即死させ、甲斐は外記、志摩らの手により斬殺され、深手を負った外記もその夜死亡した。

学芸研究員 砂金 春奈  
実習生 永瀬 美希

用語解説 詳しくはP27へ

\*1 伊達綱宗

### 学芸研究員の目



学芸研究員  
砂金 春奈

この事件について、大槻文彦『伊達騒動実録』(明治42年・1909)では安芸忠臣説をとり、田辺実明『先代萩の真相』(大正10年・1921)では甲斐忠臣説がとられています。様々な解釈が伺えるのもおもしろさの一つです。

### この資料のココがすごい!!

全国によく知られた御家騒動を書き写した資料です。

### お気に入りポイント

伊達騒動は歌舞伎などの芸能の題材にもなり、また浮世絵にも描かれました。形を変えつつ語り継がれる、有名な事件です。



# 切込焼 徳利

基本情報 ■年代：江戸 ■寸法：高さ33cm 横幅16cm 口径3.5cm

周囲56cm



この資料のココがすごい!!  
表面は滑らかなように見えますが、実際には少し凹凸があります。ぜひ展示品を生で見えて感じとって欲しいです!

お気に入りポイント  
端正な文様が青々と映えます。



## 「切込焼」 色鮮やかならつきょう徳利

### 陶芸の町宮崎地区に復活した窯元!

切込焼とは、伊万里焼<sup>\*1</sup>の技術を導入した切込の磁器の焼き物である。宮城県加美郡加美町宮崎地区(旧宮崎町)の北東を流れる澄川と田川の合流付近の丘陵の裾には窯跡があり、これらは西山・中山・東山と呼ばれてきた。創業は諸説あるが、紀年銘最古の資料「染付石榴文湯呑茶碗(そめつけざくろもんゆのみちやわん)は、天保6年(1835)とされている。なお、切込焼は明治10年代に廃窯となったが、町おこしの一環として平成2年(1990)から復興された。

### 切込焼の時期区分

江戸時代の切込焼は伊達藩の「御用品」(献上)用と、「雑瀬戸」(日用品)用の2つに分類されて焼かれてきた。『切込窯跡』によると、型式組成や紋様モチーフ、窯詰め技術などの明確な差から、第I期、第II期、第III期に分けられる。それぞれの時期の特徴は次の通りである。

- 第I期 天保元年~天保11年頃(1830~40)
- ①生地が白く貫入あり。無いものは粉状の吹き出しあり。
  - ②焼台を使用し、重ね焼きは一切行われていない。

### 第II期 時期不詳

- ①第I期と似た純白な胎土に鮮やかな青色の発色をする精製品と、やや灰色の胎土(たいど)に緑がかかった呉須(ごす)の粗製品あり。
- ②瑠璃釉(るりうわぐすり)の出現。
- ③外面鉄釉(がいでんてつうわぐすり)、内面白磁の製品が多い。
- ④竜のモチーフが多くなる。

### 第III期 万延元年~明治3年(1860~70)

- ①灰色がかかった胎土に透明感のある明るい青色の呉須で文様が描かれる。
- ②精製品は重ね焼きしない。
- ③量産を目指した粗製品の増加。
- ④鉄釉は多くは無いが、濃淡の少ない漬け掛けとなる。

この作品はらつきょう徳利と呼ばれ、時期は第II期と推測される。青白っぽい生地に描かれた蜻唐草文(たこからくさもん)が印象的である。

学芸研究員 小山 悠  
実習生 佐藤 七美

用語解説 詳しくはP27へ

\*1 伊万里焼

### 学芸研究員の目



学芸研究員  
小山 悠

明治時代に廃窯となった切込焼ですが、実は大正時代にも窯を復元させようとする動きがありました。しかしうまく行かず、その話は立ち消えてしまいました。しかし、平成に入ると町おこし、地域の産業として見直され、ついには平成2年(1990)に復興することになりました。現在、窯元では親子二代に渡って伝統工芸の意味を活かしつつも、新しい「切込焼」が創られています。

基本情報 ■ 時期：明治時代 ■ 寸法：高さ18.2cm 横幅19cm 口径17.7cm 周囲62cm



## 学芸研究員の目



学芸研究員  
小山 悠

仙台市街地北部の丘陵地帯は今でこそ多くの住宅が建ち並ぶ団地ですが、焼き物に適した粘土層が広がる、窯場が多く存在していました。堤焼は、現在では宅地化のため粘土採取が不可能となり泉区に窯を移しましたが、現在でも台原周辺の良質な土を使用しており、職人の拘り、心意気が伺えます。

この資料のココがすごい!!

絶やさず守り抜かれた仙台的民俗文化財

お気に入りポイント

艶やかな色合い!海鼠釉が使われています。



「堤焼」とは ~職人の心意気を込めて~

### 堤焼の特徴

江戸時代、各藩は焼き物、染織品、金工品、木漆工品等の工艺品を奨励し振興にあたっていた。仙台藩では、工艺品は美術文化の一翼を担うと共に、日常の生活や業務のためにも必要であり、それらに直結した品が取り上げられ、各部門で城下町に根ざした専門的な発達を遂げ、仙台藩の工芸と一括するにふさわしい群を形成した。

それらの群のなかのひとつに堤焼が存在する。堤焼は力強い形と海鼠釉<sup>\*1</sup>(なまこゆう)のかかる壺、厚く鉄釉のかかる水滴など生活雑具の美しさが特徴である。

### 過去には土管にも使われた焼き物!?

堤焼の発祥は仙台藩四代藩主伊達綱村が元禄年間(1688~1704)に江戸の陶工上村万右衛門(かみむらまんえもん)を招いて台原丘陵にあった杉山台において陶器を焼かせたことに因んでいる。近世の堤町の窯業は瓦の供給を目的として開始されますが、藩主の好みに合わせた茶器を焼成するようにになり、さらに、黒褐色釉に掛け流しを特色とする重厚な趣の日用雑器の生産に当るようになった。

江戸時代後期になると、堤町の足軽衆が副業として堤焼や堤人形の製作を行うよう

になり、幕末になると洋式の軍艦を造船に当たり招かれた三浦乾也(みうらけんや)により新たな技術が導入され、明治時代から大正時代には水甕を中心に作られるようになる。

しかし、昭和初め以降、水道の普及による水甕の減少や信楽焼きの進出により伸び悩み、堤焼は土管の生産に絞り始め、製管機を導入することになった。そのような中で、昭和3年(1928)には東北産業博覧会に出品された土練器や製管器の導入が促される。活気があった堤町の窯場も、やがて外部から入ってきた安価な焼物におされるようになったこと、また堤町がある仙台市青葉区台原地区の住宅開発化が進むとともない粘土採取が不可能となった。

昭和40年頃(1965)から窯場は次第に廃業したり、移転を余儀なくされ、現在では仙台市泉区上谷刈に堤焼乾馬窯(けんばがま)が唯一の窯元として地元工艺品を作り続けている。

この作品は明治時代に作られた甕で、釉(うわぐすり)には海鼠釉が使われている。残念ながら、その作者はわかっていない。

学芸研究員 小山 悠  
実習生 佐藤 匠

用語解説 詳しくはP27へ

\*1 海鼠釉

基本情報 ■編者：宮城県税収部 ■年代：寛永元年(1624)～慶應3年(1867)の法施行 明治21年(1888) 11月編集 ■寸法：縦19cm 横13.3cm 厚さ0.4cm



## 明治時代に作成された 仙台藩の税制度についてまとめた書物

### 仙台藩租税要略とは

本書は明治18年(1885)に宮城県**税収部**<sup>\*1</sup>の収税長**山田揆一**<sup>\*2</sup>(やまだきいち)が宮城県知事松平正直の命令で編纂し、明治20年(1887)に編集作業が完了した仙台藩の税制についてまとめた書物である。江戸時代に寛永年間(1624～45)から慶應年間(1865～67)までの約200年余りの期間仙台藩で実施された税制度を徴収賦課(ちょうしゅうふか)の方法から増損沿革(そうそんえんかく)に至るまでを概観したものである。

大蔵省が明治18年に旧来の日本の租税制度の沿革を知る目的で編纂した資料『大日本租税志』の発行を受け、その意図を汲み収集した文献資料の不足を補う目的として、複数あった藩の一つである仙台藩の私制に関する資料を集成編纂されたことが序文に記されている。

この仙台藩租税要略は代官役であり、諸藩制度の記録や植林事業で仙台藩に貢献した陸奥仙台藩士相沢儀伝太(あいざわぎでんた 1806-1879)の記録をもとにしたといわれている。

### 租税要略の構成

本資料は全5巻で構成されている。第1

巻の田制には田畑茶畑本代定法・新墾・荒潰地・散田・検地など土地制度に関する法令や規定が、第2巻の田租には年貢・除高引高・簿書など田畑年貢とその徴収に関する法令や規定が記されている。第3巻の雑税には諸役・清酒役・煙草役・油役・繭糸役・馬牛役など田畑年貢以外の商工業生産に賦課する税について御蔵方・国産方・山林方についてそれぞれ記述がある。第4巻の徭役(ようえき)には人足定・沿革上・沿革下・労役に関する一般的規定と労役制の変化を記している。第5巻の雑篇(ざつへん)には税課法口授・管見録・米と塩の密売の取り締まり法規までを追加した。また付録として正徳2年(1712)の税課法口授、寛政2年(1790)の管見録が収録されている。

田畑の年貢を基準として分類され、田畑年貢以外の商工業生産に関する税、労働に関するもの、それ以外という分け方を行っている。

学芸研究員 佐藤 由浩  
実習生 近内 威志

用語解説 詳しくはP27へ

\*1 税収部  
\*2 山田揆一

### 学芸研究員の目



学芸研究員  
佐藤 由浩

仙台藩租税要略は明治時代に仙台藩の税制の資料をまとめたもので、大正14年(1925)仙台叢書別集第2巻に収録されて以降、仙台藩の租税制度のみならず藩政全体を研究するための資料として利用されています。

この資料のココがすごい!!

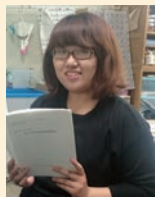
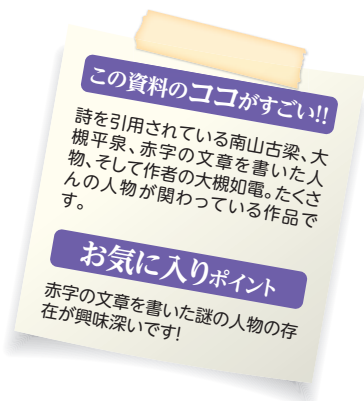
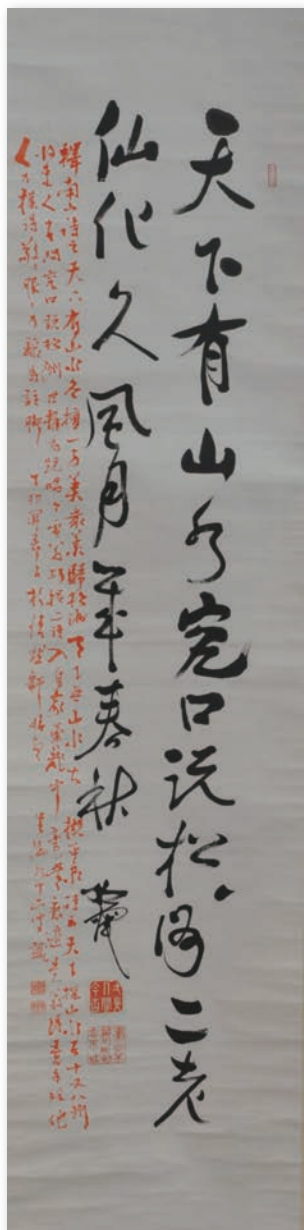
江戸時代の税について調べやすいように税の種類ごとにまとめられています。

お気に入りポイント

明治から現在まで、約130年という時を経験して来た本の風格です。

基本情報 ■作者：大槻如電(1845～1931) ■年代：明治～大正時代

■寸法：縦200cm 横52cm

学芸研究員  
森 千可子

## 学芸研究員の目

作者の大槻如電は、博識で和漢洋の学に通じていました。研究は歴史・地理から演劇・歌舞音曲に及び、脚本・劇評の執筆、舞踊の作詞作曲・振付けもおこなっています。そんな大槻如電のこの作品は、全貌が分かっていないので大変興味深いです。



## 多才な学者・大槻如電の謎多き作品

## 作者・大槻如電とは？

明治～大正時代の学者、大槻如電(おおつきによでん、じょでんとも)。仙台藩士大槻磐溪の二男、同文彦の兄であり、名は清修、字は念卿、通称は修二。維新後は海軍兵学寮、文部省に奉職し、明治7年(1874)に辞官した。如電は和漢洋学から文芸、音楽、舞踊まで博学多才であり、著に「日本教育史」、「洋楽年表」などがある。

## 作品について

作品には、

天下有山水究口説  
松洲二老  
仙化久風月 ■ 春秋  
如電

と書かれている。

詩中の「天下有山水」は江戸時代後期の禅僧・漢詩人で仙台的瑞鳳寺<sup>\*1</sup>に住んだ南山古梁(なんざんこりょう)の詩である。「究口説松洲」は江戸時代の儒学者であり、仙台藩に仕え、養賢堂<sup>\*2</sup>の学頭を務めた大槻平泉(おおつきへいせん)の詩である。「松島之詩」はこれらを引用して書かれた詩であり、掛軸の左端に書かれた赤字の文

章に「南山詩〜」、「大槻平泉詩〜」と書かれていることから、2人の詩を引用したということが分かる。また、南山、平泉の詩にはそれぞれ「松洲」という文字がある。これは現在の松島のことを指し、さらに「松洲」は如電が書いた詩の中にもあるため、この詩が「松島之詩」と呼ばれたと考えられる。

また、赤字の文章には「丁卯(ひのと)」、「六十二」とある。「丁卯」は明治3年(1867)もしくは昭和2年(1927)を指すと思われ、「六十二」は62歳のことを指し、明治3年(1867)か昭和2年(1927)の時、62歳であった人物が赤字の文章を書いたと考えられる。ただし、明治3年(1867)の時に22歳、昭和2年(1927)の時は82歳のため、如電の書いたものではないと思われる。さらに、「電翁」という文字があり、「翁」という言葉は自分の尊敬する人物に使う言葉であるため、赤字の文章は如電を尊敬する人物によって書かれたと考えられる。

学芸研究員 森 千可子  
実習生 梅宮 崇成

用語解説 詳しくはP27へ

\*1 瑞鳳寺  
\*2 養賢堂

基本情報 ■作者：斎藤弓弦(1881~1947) ■年代：明治後期~昭和初期

■寸法：縦220.0cm 横65.4cm



### この資料のココがすごい!!

水しぶきを立てる養老の滝が美しく、描かれた人物の心境が伝わります。

### お気に入りポイント

養老の滝の勢いと揺れて落ちる紅葉! 滝の音が聞こえてくる作品ですね。



学芸研究員  
安保 智

### 学芸研究員の目

元正天皇にとって養老の滝との出会いは霊亀から養老に改元を行ったことから分かるように大きかったのだと思います。まさに心に残る風景になったのでしょ。



## 女帝を喜ばせた美しい滝とその伝説

### 元正天皇との出会い

『続日本紀』養老元年(717)11月癸丑(17)条によれば、女帝である**元正天皇**は行幸の途中で美濃国(現在の岐阜県)の養老山を訪れる。天皇は養老山の霊泉で体を洗うと病気が治り、これを喜んで年号を霊亀から養老に定めたとある。いわゆる養老改元の詔である。元正天皇は**養老の滝**を深く愛したとみられ、養老2年(718)に再び訪れている。

天平12年(740)、元正天皇の後に即位した聖武天皇も養老の滝がある美濃に行幸している。この聖武天皇の行幸につき従ったという、大伴東人と大伴家持が詠んだ、養老の滝に関連した歌が『万葉集』に記載されている。養老の滝は、天皇だけでなく、当時の歌人たちにも感動を与えたのだろう。

### 孝子伝説とは?

美濃国に貧しい若者と老父がいた。若者は薪を拾って売り、米や老父のために酒を買って暮らしていた。老父は目が不自由で日々の酒だけが楽しみであった。ある日若者が山の中で転び眠ってしまったところ、夢の中で酒の匂いがした。目が覚めると香り高い酒が湧き出る泉があった。若者は喜んで老父にその酒を与えたところ、老父の目が見えるようになり、酒の水は不自由な体を治すことで有名になった。『十訓抄』では若者の名前は後代になって「孝子」とされるようになった

たとしている。

養老伝説の初見は『続日本紀』の養老改元の詔とされているが、「孝子」の話はなく、美泉で若返る効果や薬効のある水が湧いていたと記録する。他にもこの泉の水を飲んだり浴びたりする者、ある者は禿げた頭に髪が生え、またある者は見えない目が見えるようになったという話もあって面白い。

### 作者の斎藤弓弦について

斎藤弓弦(さいとうゆづる)は明治14年(1881)、宮城県伊具郡丸森町に斎藤丈八の次男として生まれる。名は亀治。明治33年(1900)より帝室技芸員になり、やまと絵を復興させ、歴史画を得意とした小堀鞆音(ともと)に師事し、土佐派を研究する。斎藤が改元のきっかけとなった養老の滝を描いた背景には、歴史画を重んじた小堀に師事したことがあるとみられる。斎藤は数々の審査会に入選し、作品は東宮職・皇后職御用品ともなる。大正3年(1914)第8回文展で初入選し、その後も文展・帝展で活動の傍ら、教科書の挿画も手がけた。戦後は地元に戻って、創作活動に励み、昭和49年(1947)に93歳で亡くなった。

学芸研究員 安保 智  
実習生 菅田 千恵

用語解説 詳しくはP27へ

\*1 元正天皇  
\*2 養老の滝

# 用語解説

## P2 墨書人面土器

### \*1 市川橋遺跡

多賀城跡の南面一帯に位置する遺跡で、本館のシンボル展示である墨書人面土器の出土地。旧石器から平安時代にかけての複合遺跡だが、一般には奈良・平安時代を中心とした古代の遺跡として知られている。8世紀初め頃の遺構として、掘立柱建物跡や竪穴住居跡などが発見されており、居住域を区画する溝跡や堀跡もみられる。また、当時の一般集落にはあまりみられない硯や木簡、漆紙文書などの遺物も出土している。8世紀後半には東西・南北方向の道路が順次整備され、9世紀には基盤の目のように区画された町並みが形成された事が発掘成果によって明らかにされた。

### \*2 多賀城

古代陸奥国の城柵で、仙台平野北端低丘陵上の宮城県多賀城市市川・浮島に位置する。多賀城碑によると神亀元年(724)に大野東人が創建したとされる。国府と鎮守府(のちに胆沢城に移転)が置かれ、律令国家による東北地方の行政・軍事の中心地であった。外郭は築地・材木堀で区画され、最大が東辺の1050m、最小が西辺の660mの不正方形を呈し、東・西・南に八脚門を持つ。内郭中央に朝堂院風の建物配置を有する政庁があり、四期の変遷が明らかにされている。また、外郭の周辺で多賀城付属の多賀城廃寺や国司の館・道路・町などの遺構群が検出された。

## P4 おしらさま

### \*1 おしら祭文

おしらさまの由来を説くもので、オシラ本地ともいう。東北地方では、正月・3月・9月ごろに、巫女がおしらさまを手を持ってその由来を語る儀礼がある。その内容は地域によって様々だが、東北地方では中国六朝時代の『搜神記』系の物語である場合が多い。この『搜神記』系の物語は、代官の娘が不在の父を連れてきたら嫁になると飼馬に約束するが、帰ってきた父はこの馬を殺してしまい、馬の毛皮が娘を巻き上げて飛び去り、数日後に庭の桑の木に蚕になって現れたというものである。

## P6 竹二雀園

### \*1 竹に雀

竹林に飛び交い、とまる雀の姿が絵画や文様の主題となり、転用されて家紋となったもの。竹の節の丸の中に葉と一、二羽の雀を描いたもの、丸の中に竹節・葉と雀を描いたものがある。竹と雀をわけるものもある。公家の勤修寺一門、武家では上杉・伊達氏などの家紋として有名。

## P8 伊達綱村領知朱印状

### \*1 伊達綱村

仙台藩主伊達綱宗の長男として万治2年(1659)に江戸藩邸で誕生する。2歳の頃に父に替わり仙台藩主となる。幼かったため、一門である一閣藩主伊達宗勝、岩沼藩主田村宗良が後見人として藩政に携わった。寛文9年(1669)に元服、第4代将軍家綱から諱字を受けて綱基と名乗る。寛文11年(1671)に伊達騒動が起こると後見人

2人はその非政の責任を問われ後見人を解かれた。

後見人解除後、綱村は側近を重用しつつ独裁政治を推進し、藩主権力強化に努めた。こうした動きの中で封建秩序を確立するため、儒学を奨励する一方で『伊達出自世次考』『伊達正統世次考』『伊達治家記録』といった伊達家の系譜についての書物の編纂にあたった。

また、僧鉄牛を招いて大年寺を建立、亀岡八幡神社の造営、塩釜神社の修築を行うなど仏道などにも深く傾倒していた。享保4年(1719)江戸麻布邸で死去61歳。

### \*2 知行宛行状

仙台藩では、「地方知行制(じかたちぎょうせい)」といわれる家臣に知行地と呼ばれる土地を与え、自らの責任で年貢をとる権利が認められていた。

そのために歴代の藩主が家臣に対して、知行の割り当てを示し、その知行の権利を保障した文書が、「知行宛行状」である。藩主と家臣の主従関係のなかめをなす知行宛行状は、藩主の代替わりに際して一斉に発給されるほか、家臣家の当主の代替わりに発給された例もある。

## P10 海国兵談写本

### \*1 洋学

江戸時代後期を中心にして、西洋事情・西洋科学に関して行われた研究およびその知識の総称。西洋の学術・文化・技術の日本への伝来は、16世紀中ごろ、キリスト教の布教とともにポルトガル人、スペイン人によって始まったが、これは南蛮学、蛮学などとよばれた。やがて江戸幕府が鎖国政策をとったことにより、西洋の学術・文化は、日本への渡来を許された唯一の西洋の国オランダを介して移入されることになり、これは蘭学とよばれた。開国政策がとられた幕末期になると、オランダ人以外の諸外国人も渡来するようになり、イギリス・フランスなどの学術・文化が渡来した。洋学ということばはこの時期以降に一般化した。

## P12 塩竈詣

### \*1 往来物

平安時代末期から明治初年に至るまで広く用いられた書簡文体の初等教科書の総称。往来については鎌倉時代中期以後、書簡に常用される単語や単文の類を集めたものが往来と称されて、後に往来の語は初等教科書を意味するようになる。江戸時代に入ると往来物の流行が著しく、往来と題した教科書は約七千種にも達し、習字や社会生活に必要な礼儀作法の心得、日常百科の知識を教えるために編集された。往来物は明治初期以前における日本の教育の目的や方法を示すものとして教育史上もとても重要な資料であると評価されている。

### \*2 塩竈神社

塩竈神社は塩竈湾を見下ろす一森山頂にある。参道は表坂・裏坂・七曲坂の三ヵ所、表坂は大鳥居から楼門まで急勾配の石段が続く。祭神は経津主大神(ふつぬしのかみ)・武甕槌神(たけみかずのかみ)・塩土老翁神(しおつちのおじのかみ)であり、右宮・左宮・別宮の社殿がある。塩竈神社の創建年代は明らかではないが、十一世紀には陸奥国最大の神社として国司の崇拜を受けていたとみられる。近世では伊達氏らが当社を崇敬し、慶長12年(1607)に伊達政宗が大造営を行った。主な祭礼は荒神

興が市内を巡ることで有名な帆手祭、神社の春祭りで豊作を祈願する花祭などが挙げられ、帆手祭と花祭は塩竈の町の繁栄と火防のために始まった。境内にある宝物殿は塩竈神社文書を蔵し、国指定重要文化財の黒漆太刀と糸巻太刀がある。

## P14 奥州仙台萩

### \*1 伊達綱宗

江戸前期の大名。陸奥国仙台藩主。忠宗の六男。幼名藤次郎。隠居して品川屋敷に住み、品川隠公と呼ばれた。綱宗は不遇の生涯を芸術に託し、絵画だけではなく、工芸や刀剣にも本格的な技量を発揮している。(絵画をはじめ、刀剣、金工、漆工、茶道具などの各分野に手を染めたと伝えられるが、工芸品に関しては合作や指導による例が少なくない。)狩野派の絵師を隠居の品川屋敷に招いて交流した彼は、遂にはその様式の真髄にせまる世界を獲得する。「絹本著(けねぼんちゃく)色(しよく)霊(れい)昭女(しょうじょ)・牡丹(ぼたん)・芙蓉図(ふようず)」は、綱宗の傑作のひとつであり、狩野探幽、常信の手法を基に、おほかで、気品溢れる画面に仕上げる。「花鳥図屏風」でも、金と銀の対比を中心に様々な色彩を巧みに活用するのをはじめ、大藩の当主であった自負をも宿らせている。

## P16 切込焼 徳利

### \*1 伊万里焼

佐賀県西松浦郡有田内山一帯の磁器窯において、泉山の磁石を主原料とした焼き物。有田焼とも。有田の製品であるが、明治時代以前はそのほとんどが伊万里港から出荷され、その名がついた。染付(呉須という青色顔料による下絵だけのもの)・彩絵(色絵・赤絵とも。染付をほどこさない白い素地に上絵付したもの)・染錦(染付をほどこした素地に上絵付をし、さらに金銀彩を加えたもの)の三種類に分ける。

## P18 堤焼 甕

### \*1 海鼠釉

焼物の釉薬(ゆうやく)の一種で、名称の由来はその釉色が海鼠に似ているところからきている。釉の主成分は灰釉(かいゆう)で、下釉の上に類似の釉を上掛けし、釉の流動によって斑文(はんもん)・流文などが現れたもの。その起源は中国宋(そう)元代の鈞窯(きんよう)にまでさかのぼるといわれている。景パール現象によって青白い美しい呈色が得られ、その景色を珍重して中国、日本で美術陶磁に多く施されている。

## P20 仙台藩租税要略

### \*1 税収部

現在の税務署の前身の機関で明治19年(1886)に収税課が収税部に名称を変更したもの。明治初年、国税は各藩、ついで府県が古くからの慣習にしたがって徴収していた。しかし、明治11年(1878)に府県制が整備されると国税徴収・未納処分を郡長・区長に委任、それを大蔵省租税局の下部機関である収税委員出張所(のちの租税局出張所)が監査をおこなった。明治17年(1884)5月に租税局出張所にかわって府県に収税課を置き、府県官である

収税長・収税属が収税局の指導の下に郡区長・戸長の国税徴収事務を管理した。

### \*2 山田揆一

弘化4年(1847)一関藩藩士桜岡頼純の子として生まれる。廃藩後水沢、磐井県に出仕し、のち宮城県で会計課長、収税長を務める。その後、石川、鹿兒島、熊本各県の税務監督署長を経て再び宮城県に書記官として赴任する。広島・福岡県書記官に就いた後、大正2年(1913)北海道の内務部長を最後に退官した。40余年の地方官の経験と“およめさん”と呼ばれるほど柔和で当時の役人としては珍しい丁寧な人柄を買われ、大正4年(1915年)に68歳で6代目仙台市長に就任、大正2年(1923)に没した。

## P22 松島之詩

### \*1 瑞鳳寺

宮城県仙台市青葉区霊屋下にある臨済宗妙心寺派の寺。本尊は釈迦三尊。寛永11年(1634)初代仙台藩主伊達政宗の命により清岳宗拙が開創。政宗(瑞鳳殿)、忠宗(感仙殿)、綱宗(善応殿)3代の霊廟を安置していたが、戦災のため惜しくも諸堂とともに焼失した。その後再建された瑞鳳殿は、豪華な桃山風建築で知られる。なお、現在は瑞鳳殿の脇に資料館が置かれ、感仙殿・善応殿からの遺品を中心に展示されている。

### \*2 養賢堂

仙台藩の藩校。藩士の子弟を教育した場所。元文元年(1736)、五代藩主伊達吉村により創設された。学科は漢学・習字・算術・魯学・蘭学・歌学・習礼・剣術・槍術・兵学の多数にわたり、規模や内容において当時の藩校の代表的なものであった。

## P24 養老孝子図

### \*1 元正天皇

715~724年の間在位。母は元明天皇で天武天皇9年(680)に生まれる。霊亀元年(715)9月、皇太子首皇子が幼年のために元明天皇の譲りうけて即位。これは中継ぎの意と解されている。霊亀3年(717)11月、美濃国多度(たど)山の美泉の効験にもつぎ霊亀から養老に改元した。養老2年(718)、『養老律令』が撰修され、翌3年6月、皇太子首皇子がはじめて朝政を聴き、同4年3月、征隼人軍を興し、五月に『日本書紀』を撰進する。同6年間四月、百万町歩の開墾を計り、翌7年4月に三世一身の法を発した。神亀元年(724)、聖武天皇に譲位し、天平20年(748)4月に崩御。

### \*2 養老の滝

岐阜県養老郡養老町にあり、周囲は公園として整備され、四季を通じて多くの観光客が訪れる。養老の滝は養老山地の東山腹、滝谷の上流に位置し、日本三大名瀑の一つである。標高約280m、高さ約30mで、周囲の楓を中心とする木々の間から落ちる瀑水は幅約7mにおよび紅葉を映す。この美泉は養老改元につながり、孝子伝説を生んだ。養老山地は古く多度山と称されていたらしく、霊亀3年(717)9月、元正天皇は行幸し、多度山の美泉は大瑞に合うとして改元を行った。

資料の調査って、  
どうやってるの??

# 博物館実習の様子を見てみよう!!

東北学院大学博物館は大学内で開講されている博物館実習や博物館実務実習における学びの場として活用されています。これらの実習では、教員・学芸員の指導のもとで、館蔵資料を実際に扱いながら、資料の調査・保存・展示方法を学ぶなど、学芸員の実践的な技術鍛錬が行われています。



私たちが  
展示をします!!

## 1 資料調査

資料をじっくり観察。  
辞書や専門書などで資料の歴史背景も調べます。



## 2 写真撮影

一眼レフカメラ・三脚・レリーズで  
写真撮影。  
気分は名カメラマン!?

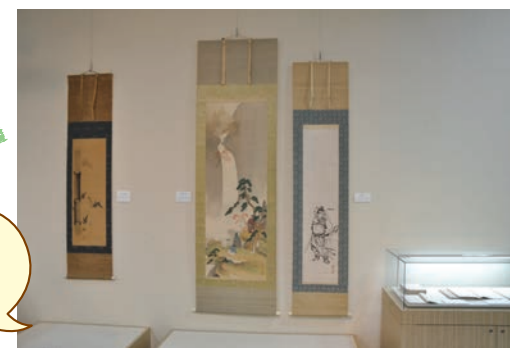


## 3 展示作業

文書類は展示ケースへ。  
展示には卦算(透明度の高いガラス製の文鎮)を使います。



掛軸はワイヤーとフックで  
吊り下げます。  
曲がらないように…。



完成!!

## 4 展示解説

最後に展示資料の解説を行います。  
これであなたも立派な学芸員!



# ごあいさつ

東北学院大学博物館は平成21年秋に開館した大学博物館です。大学の研究成果を社会にお伝えするとともに、学生の教育と大学院生の学びの場所を提供しています。これまで5年間にわたり、学内実習の場のみならず夏休みには館園実習を受け入れてきました。一方、大学院生には学芸研究員制度を設け、雇用された大学院生は展示作成、展示解説、資料整理などの実務にあたっています。こうした教育活動によって、学芸員としての経験と実績を積んだ学生・院生から、毎年一～二名の地域博物館の学芸員や教育委員会の文化財担当職員を輩出しています。

こうした教育活動に不可欠なのが、実物の歴史資料です。大学博物館では、掛軸や古文書、美術資料、考古資料、民俗資料、写真資料、典籍などさまざまな形態の資料を収集し、実習に供しています。とりわけ東北文化に関する資料や仙台藩に関連する資料を収集し、コレクションを形成してきました。

本書は、そうして収集してきた館蔵資料を紹介する解説書です。ここで掲載する資料の写真は、学内実習の博物館実習生が撮影したもので、見どころを学芸研究員の大学院生が作成、本文は館園実習の学生と学芸研究員が執筆しています。大学博物館で学ぶ学生・院生の共同作業による図録作成は、実習の成果をかたちにするものであり、専門的な内容をわかりやすく解説するものとなると考えています。

今回の図録では、「墨書人面土器」や「おしらさま」など、開館当初から当館の名品として親しんでいただいた資料に加え、「伊達綱村領知朱印状」「奥州仙台萩」「仙台藩租税要略」といった仙台藩の研究に資するものや、「竹二雀図」「養老孝子図」などの美術資料、埴焼や切込焼などの工芸資料を掲載しています。

館蔵資料を広く知っていただくために、今後は毎年一冊ずつこうした図録を作成し、文化財に親しんでいただくための展示を学生たちとともに企画していきたいと考えています。

東北学院大学博物館



※本書の監修は、加藤幸治(文学部歴史学科准教授)が、編集は学芸研究員熊谷明希(大学院文学研究科アジア文化史専攻博士後期課程)が担当した。本書の資料写真は、2015年度博物館実習(学内実習)履修の文学部歴史学科3年生(氏家亮輔・木村茂行・佐藤杏香・佐藤七美・曾我部絵梨・永瀬美希・畑健太郎・平原あかり)が撮影した。

# 東北学院大学博物館の紹介



東北学院大学博物館は、大学が蓄積した知的財産を公開することを目的に、2009年11月に開館しました。大学は研究をするための様々な文献資料や実物資料を保有しています。しかし、それらが市民の目にふれる機会はあまりありません。大学博物館は、それらの知的財産を一般に公開する役割を果たしています。

大学博物館の最大の責務は、最先端の研究と市民とを橋渡しすることにあります。当館が当面対象とする分野は、歴史学、考古学、民俗学です。展示される資料は多岐にわたり、たとえば、古代の遺跡から発掘された土器や石器、中世の民衆が願いを刻んで仏に捧げた石碑、江戸時代の官僚が残した行政文書、前近代に庶民が生活に用いた日用品、病氣平癒のまじないに使われた道具や護符などがあります。展示は、半年から2年ごとに順次展示換えされていきます。

開館時間	月曜日～土曜日 午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日	日曜日、祝日・休日、大学の定める休業日
入館料	一般200円(減免措置有り)
問合せ先	住 所：〒980-8511 宮城県仙台市青葉区土樋一丁目3-1 電話番号：022-264-6920



親孝行の滝!



馬と娘の  
不思議なお話…

江戸時代の  
教科書



**KOREMITE**  
■ 考古学 ■ 歴史学 ■ 民俗学 ■ 展示

— 東北学院大学博物館 収蔵資料図録 — **VOL.1**

編集・発行 東北学院大学博物館

発行日 2016年3月10日

〒980-8511 宮城県仙台市青葉区土樋一丁目3-1

TEL: 022-264-6920

<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp>